条規」に大きく貢献した人物である。今回も神奈川大学図書館、国立国会図書館、東京都立中央図書館で、関係論文 26 点、関係資料 13 点を集めた。帰国後、手元の資料と合わせながら研究を進めたいと考えている。

写真 2　資料豊富な国会図書館

滞在期間は瞬く間に過ぎ去って、まだまだ探したい資料も沢山あり、3 週間では物足りない気がした。研究と資料調査以外の時間は、神奈川大学のキャンパスをまわったりした。常民文化研究所、非文字資料研究センターの規模と、整備された資料に感服した。90 年以上の歴史を誇り、日本国内のみならず世界の民俗研究のトップの位置を占める機関で研究のチャンスを得、本当に幸運であった。今回は暖冬に恵まれ、温かい日も続き、横浜から東京へ向かう途中、白い富士山も見えた。また小熊教授から時折の鰻料理もご馳走になり、誠に充実した 20 日間だった。最後に小熊教授を始めとする非文字資料研究センターの先生方、及び成田紅音さんを始めとする事務室の方々に再度感謝の意を申し上げる。

写真 3　毎日白楽寮から神奈川大学まで通った道

日本における初期の口演童話についての研究報告

Marine PENICAUD
（フランス国立科学研究所（CNRS）フランス東アジア文明研究センター）

非文字資料研究センターと、私が所属するフランス東アジア文明研究センター（CRCAO）（フランス国立科学研究所（CNRS）のメンバー）との 2015 年度短期交換プログラムにおいて、2016 年 1 月 8 日から 1 月 27 日まで大学院研究者研究職として非文字資料研究センターに派遣されました。私を受け入れてくださったことに大変感謝しております。

私の研究内容は巌谷小波の生涯（1870―1933）と、1920―1930 年代における口演童話（子供に物語を話すこと）の写真や音声資料の調査を通して、口演童話の初期段階を分析することでした。

巌谷小波は近代日本児童文学のパイオニアであり、1895 年には子どものための読み物としてお伽噺という言葉を作りました。出版社の博文館で数え切れないほどのお伽噺を書いた後、彼は 1897 年に学校や公の場で、「読み物」を「聞く物」へと観客に適応させながら、子供たちのための語り部として、彼自身が作ったお伽噺を語り始めたのです。1908 年以降、彼は日本国内のみならず、日本の領土であった満州や韓国（1913 年）、台湾（1916 年）、ハワイ（1926 年）、サハリン（1929 年）へと、講演と口演童話の会のために巡業して回ったのです。1917 年から彼が亡くなる 1933 年まで、博文館の多くの子ども向け雑誌の編集長の仕事と引き換えに、彼は年の半分を上演活動に費やしました。巌谷小波は、その回のテーマに合った俳句、またはことわざを自分自身で掛け軸（掛け物）に書いて各上演に組み入れていたのでした。

彼が活動している口演童話の写真には老若男女問わず、多くの観客が映し出されています。すなわち、彼の人気は子どもたちからだけではなかったのです。上演は屋内でも屋外でも肉声で行われていました。

今回の滞在期間中、私は日本の子どもたちの文化的歴史の一翼を担う巌谷小波の、口演童話に関連する資料の調査を望んでいました。また、彼の口演活動の場所や日にちに関する情報収集その他、写真や録音した音声記録を可能な限り参照したいとも考えていました。

今回の目的は、非文字資料研究センター、日本常民文化研究所を含む神奈川大学図書館で情報を収集すること

でした。また、巌谷小波と彼に関わる作品の多くを収蔵する白百合女子大学児童文化研究センターや、東京・千代田区にある公益財団法人日本青少年文化センター、そして大阪では一般財団法人大阪国際児童文学振興財団（IICLO）等々を訪れることも目的の一つでした。さらに私は巌谷小波の孫息子であり、明治学院大学の名誉教授でもある巌谷國士先生にお会いすることも予定していました。先生は、2012 年に財団法人日本青少年文化センターに私の研究を紹介してくださった方であり、ポストカードや写真を含む巌谷小波の家族関連資料の管理者でもあります。

私が非文字資料研究センターに来る少し前、若者のための日本文化財団のサポートを伴った、大分県の玖珠町久留島武彦研究所を、メールで所長の金成妍（キム・ソンヨン）さんに紹介していただきました。長年、口演童話活動において小波のパートナーであった久留島武彦についての情報を集めるべく同研究所を訪れるつもりでしたが、あいにく金さんが健康上の理由から私の訪問を受け入れられなくなり、訪問は中止となりました。

さらに連絡と時間の不足が理由で、IICLO への訪問も実現できませんでした。

若者のための日本文化財団は口演童話に関する研究資料を収蔵していないため、訪問する必要性は感じられませんでした。

滞在中の 6 日間は神奈川大学図書館で資料を集め（主に非文字資料研究センターと日本常民文化研究所）、2 日間は東京の国際子ども図書館で資料を集めました。口演童話の歴史に関する資料があまりにも少ないことに私は驚きました。フランスでも日本の児童文学と文化に関する資料は十分でないこともあり、小波のいた時代とそれ以降の文化的背景における彼のキャリアを分析するために、結局のところ研究範囲を日本の児童文学と文化の歴史にまで広げることにしました。

神奈川大学外国語学部の村井まや子先生との対談は、お伽噺と芸術の関係に対する私の研究の幅を広げる手助けとなりました。村井先生は親切にも私の研究報告発表会に出席してくださいました。

私は巌谷國士先生に連絡を取ってはみたもののお忙しいようで、私の滞在期間中は東京近郊にいらっしゃらなかったため、先生のもとを訪問することは叶いませんでした。それでも先生は、ご自身で監修し資料を収集した、埼玉県立近代美術館での展覧会「旅と芸術」を私に紹介してくださいました。展覧会には口演童話上演巡業中の巌谷小波のポストカードが飾られていました。児童文化研究センターを訪問し、小波日記研究会の猪狩友一先生とお会いした後、大学講師であり巌谷小波作品の専門家である中川理恵子先生と一緒にその展覧会に赴きました。猪狩先生は親切にも 2000 年 3 月から小波日記研究会の提供する出版物（その団体が刊行する「巌谷小波日記翻刻と注釈」）のコピーを私にくださいました。前回の 2012 年の訪問時から巌谷小波研究に向けた重要な資料として出版物のコレクションを、親切にも送っていただいていました。

東京・千代田区神保町の古本屋と本屋では２日間かけて望んでいた資料を探しました。そこで、個人的なコレクションを全巻揃えるために必要な小波お伽全集 [1] の原文書物のコピーを含んだもの、日本中の口演童話活動の情報が記されており、巌谷小波のキャリアも含まれている、内山憲尚の「日本口演童話史」[2]、そして児童文学の歴史に関わる他の作品（関係する伝記が見て取れる資料）を買うことができました。

大学キャンパス内での施設利用を可能にするなど、短期交換プログラムの隅々まで私を手助けしてくださった非文字資料研究センターのスタッフの方々に大変感謝しております。彼らの協力が私の滞在を大変有意義なものにし、そのおかげで実りある研究成果を上げることができました。国際寮では素晴らしいスタッフが協力的な対応をしてくださりとても快適でした。チューターの八角香さんとアドバイザーの熊谷謙介先生が忙しいことは予め理解していましたが（1 月が大学の期末試験期間であることは後で知りました）、研究の準備や 1 月 26 日の研究報告発表会、そして日本語でのメールの書き方等々で強力にサポートしていただき、大変お世話になりました。彼らなくして研究を成し遂げることはできなかったと思います。改めてお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

[注]
(1) 巌谷小波、小波お伽全集　第九巻　少年短編、1930
(2) 内山憲尚、日本口演童話史、文化書房博文社、1972